

平成22年5月8日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19530584
 研究課題名（和文） 日本語の特異的言語発達障害の特徴および指導法に関する言語学的研究

研究課題名（英文） Linguistic study on the nature and treatment of Japanese specific language impairment

研究代表者
 伊藤 友彦（ITO TOMOHIKO）
 東京学芸大学・教育学部・教授
 研究者番号：40159893

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は日本語を母語とする特異的言語発達障害（Specific Language Impairment, 以下 SLI）児2例の縦断研究によって、日本語 SLI の特徴を明らかにし、指導法を提案することであった。本研究の結果、語彙面（理解語彙）は急速に発達するが、文法面（時制、受動文）の成績は改善しにくいこと、受動文を補助ストラテジーによって獲得していることなどが明らかになった。これらの結果から、SLI 児の指導法の開発のためには補助ストラテジーの研究が重要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study was to investigate the nature and treatment of Japanese children with specific language impairment (SLI) by examining the longitudinal data of the two Japanese children with SLI. The results of this longitudinal study demonstrate that while lexical aspects (receptive vocabulary) of language develop rapidly, grammatical aspects (TENSE and PASSIVES) do not in children with SLI. In addition, the results of this study show that such children try to acquire passives by means of compensatory strategies. Therefore it is suggested that the study of compensatory strategies is crucial to the development of the method of treatment for children with SLI.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：特異的言語発達障害、日本語、時制、受動文、指導法、言語学

1. 研究開始当初の背景

平成 18 年 6 月の学校教育法の一部改正により、平成 19 年度から名実ともに特別支援教育の時代に入るようになった。これにより、通常学級において特別な支援を必要としている子どもたちの問題に小・中学校が本格的に取り組むことが求められている。通常学級において特別な支援を必要としている子どもたちの中に特異的言語発達障害 (Specific Language Impairment, 以下 SLI と略記する) の子どもが存在している。SLI の子どもは、知的障害がなく、対人関係、聴覚障害などの問題も認められないにもかかわらず、言語の特定の側面に限って正常な発達が妨げられるという特徴をもつ。

欧米では SLI について活発な研究が行われているが、わが国では SLI という名称そのものがあまり知られていない。わが国では、学習障害 (以下 LD と略記する) 等と診断されているようである。SLI の出現率は、英語圏では 5 歳児で 7.4% という報告 (Tomblin et al., 1997) もあり、かなり高い。したがってわが国においても通常の学級の中に、比較的高い割合で SLI に相当する子どもたちが存在しているものと推察される。

SLI の子どもたちは、「知的障害や聴覚障害などの明らかな障害がないのに、ことばがすぐ出てこなかったり、他の子どもたちが普通しないような日本語の誤りをするのはどうしてだろう？」などと担任教師や親に思われながら、学校生活をおくっているものと思われる。SLI の子どもたちが豊かな学校生活をおくるためには、彼らがもっている言語の問題を周囲の人々が正しく理解することがまず不可欠である。

しかし、上述のように、わが国では SLI があまり知られておらず、研究も極めて少ない。その理由の一つとして、教育や言語臨床の場における言語学的知識の乏しさが考えられる。なぜならば、SLI の特徴を評価するためには言語学的知識 (音韻論、形態論、統語論、語用論など) が必要となるからである。残念ながら、わが国の教育関係者や言語発達障害の臨床家、研究者の中に、言語学的知識をもつ人は少ない。

このような背景のもとに、我々は平成 16 年度から平成 18 年度まで科学研究費 (基盤研究 C、「日本語の特異的言語発達障害の特徴および評価法に関する言語学的研究」) により、日本語 SLI の特徴および評価法に関する言語学的研究を行った。

その結果、1) 日本語を母語とする子どもたちにも、文法面に特に問題がある子どもが存在すること、2) 日本語 SLI の特徴として、時制の誤りや受動文・使役文・やりもらい文の誤り、さらには格助詞の誤りなどがみられること、が明らかになった。

2. 研究の目的

今回の研究では、平成 16 年度から 18 年度までの科学研究費での研究成果をふまえて、上記 2 点を中心に、日本語 SLI の研究を進展させ、日本語 SLI の特徴をさらに明らかにするとともに、SLI 児の指導法の手がかりを得ることを目的とした。

今回のメンバーは、言語に問題をもつ子どもたちに対して言語学的ないし心理言語学的アプローチを行ってきた伊藤を研究代表とし、言語学的視点からの日本語 SLI 研究の第一人者である福田真二と福田スズヰー、発達期のことばの問題に幅広い研究業績をもつ大伴、コミュニケーション障害に対して豊富な臨床経験を有する藤野からなる。福田スズヰーは、福田真二とともに、日本語 SLI の言語学的研究に関する代表的な研究者の一人である。

本研究の特徴は、言語学的分析が可能なメンバーが中心的となっていることと関連するが、言語学の知見とともに、生成文法理論の枠組みを用いるところにある。

本研究の結果は、通常の学級に在籍する SLI 児の指導に関して不可欠な基礎的知見を提供する点で教育上有意義であると思われる。また、SLI の、個別言語を超えた特徴と日本語に固有の特徴とが明らかになるという点で、言語研究上の意義もあると思われる。

3. 研究の方法

本研究の特徴は、平成16年度から縦断的に（原則として週に1回）指導および観察対象としている日本語SLI児2名の縦断的研究を、さらに3年間継続して行ったものである点にある。このような長期間にわたる日本語SLI児の縦断研究は他に例がないと思われる。

原則として週に一回、学生または大学院生を家庭教師として派遣した。家庭教師としての教科指導の中で、対象児の発話や理解の特徴から明らかになった対象児の言語の問題について、伊藤が中心となって検査課題を作成した。それを家庭教師の学生・院生が対象児の家庭において実施した。例えば、対象児の発話の中に指示代名詞（「これ」、「それ」、「あれ」）の使い方に誤りがみられたという報告が学生・院生からあった場合、指示代名詞についての言語検査を、伊藤が中心となって作成した。学生・院生がそれを家庭教師の際に実施し、その結果を伊藤に伝えるという手続きであった。したがって、対象児の家庭教師としての指導の報告とそれに基づく対応を話し合う場を原則として週に一回設けた。

今回の3年間の縦断研究では、1) 時制、2) 受動文、3) 指示代名詞、4) 語彙（理解語彙）を中心に検査課題を実施した。

正誤判断課題と文完成課題の一種である誘導産出課題（elicited production task）を主として用いた。いずれも刺激文を文字提示し、答えを記入させた。なお、正しく読んでいることを確認するために、いずれの課題においても問題文は音読させた。

本研究の方法論上の特徴は、本研究が言語学的分析が可能なメンバーが中心となっていることとも関連するが、言語学の基礎的な知見とともに、生成文法理論など最新の言語理論を用いて発話データおよび検査課題の結果を分析する点にあった。

また、平成16年度から平成18年度までの科学研究費による3年間の研究を通して、日本語SLIの研究を進展させるためには、国際会議・国際学会で頻繁に発表し、諸外国の研究者と、それぞれの言語におけるSLIの現れ方について情報交換をすることが最も有効な方法であることを我々は認識させられた。そこで今回は、前回の科学研究費による3年間のデータの蓄積もあるので、国際会

議ないし国際学会で1年目から毎年発表することにした。

4. 研究成果

日本語SLI児2名の縦断研究を中心とした今回の3年間の研究の結果、時制、受動文、語彙、指示代名詞、それぞれについて以下のことが明らかになった。

(1) 時制

時制については以下の結果を得た。9歳の時点では、低頻度の副詞句（例：「今から9日後に」）を用いた場合、および動詞に非語を用いた場合は低い正答率であった。14歳の時点では低頻度副詞句でも100%の正答率であったが、非語の動詞を用いた場合は産出課題の正答率は25.0%であった。これらの結果は、対象児の時制を正しく産出する力は9歳から14歳の間で十分に発達しないことを示唆している。対象児は形態論の知識が欠けている部分をレキシコンによって補っているため、非語の動詞が用いられた場合のように、レキシコンが利用できない場合は成績が低下すると考えられた。

(2) 受動文

受動文については以下のような結果であった。9歳では逆語順文の産出課題の成績は50.0%であった。また14歳でも、産出課題のみならず判断課題でも逆語順文の正答率は70%以下であった。これらの結果は9歳から14歳の間で受動文の成績に著しい伸びはみられなかったことを示している。

(3) 語彙（理解語彙）

理解語彙は急速に伸び、10歳では語彙年齢がほぼ年齢相応レベルに達した。

(4) 指示代名詞

指示代名詞について検討したところ、11歳の時点での正答率は50%であったが、それから1年以内に100%に達した。この結果から、指示代名詞は統語的側面（時制、受動文）と語彙的側面（理解語彙）の中間の発達を示すことが示唆された。

(5) 補助ストラテジー

Paradis and Gopnik (1997) は SLI 児は文法の特定の側面の手続き記憶による言語知識の獲得に困難があるため、非文法的な手がかりや宣言的記憶による言語知識を用いなければならないという仮説を提案している。受動文は SLI 児にとって獲得が困難な文として知られている。したがって、もし Paradis らの仮説が正しければ、SLI 児は受動文を獲得するために非文法的な手がかりや宣言的記憶による言語知識を用いると予測される。そこで、この点について SLI 児 1 名を対象とした約 5 ヶ月間の縦断研究によって検討した。

対象児は 4 年生の女兒であった。動詞が異なる 8 つの正常語順の受動文が文字提示され、対象児は各文の意味を線画で表現するように求められた。この描画課題は原則として月に 1 回実施された。この課題における対象児の成績は最初の 5 ヶ月間は動詞によって異なっていた。しかしながら、6 回目に 8 文はすべて正答となった。この日、対象児は「文の中の 2 番目の人が何かする人で、最初の人は何かされる人なんだね」と明示的に述べた。7 回目も全問正答であった。対象児は正常語順の受動文を正答する方略を身に付けたようであった。そこで、一定期間後、今度は逆語順の受動文を対象児に提示してみた。すると、対象児は、最初の名詞と 2 番目の名詞を両側に矢印がついた線で結びつけた。そして逆語順の受動文も正しく描くことができた。順序を正常語順に一旦もどしてから先に用いた方略を使用したと推察された。これらの結果は、対象児は補助ストラテジーを用いて受動文を理解したことを示している。

(6) まとめ

上記(1)から(4)の結果から、日本語を母語とする SLI 児は語彙面(理解語彙)は急速に発達するが、文法面(時制、受動文)の成績は改善しにくいことがうかがわれる。

また、(5)の結果から、対象児は受動文を補助ストラテジーによって理解していることが明らかになった。このことは SLI 児は定型発達児と同様の発達過程を遅れてたどっているのではなく、レキシコンを利用した補助ストラテジーによって文法面を獲得している可能性が示唆される。

したがって、今回の(1)から(5)の結果は前述の Paradis らの仮説を支持するものであると言えよ

う。今回の一連の研究結果から、SLI 児の指導においては彼らが用いる補助ストラテジーに着目することが重要であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① Ito, T., Fukuda, S.E. and Fukuda, S. Difference between Grammatical and Lexical Development in Japanese Specific Language Impairment: A Case Study. *Poznah Studies in Contemporary Linguistics*. 45 (2), 211-221 (2009).
- ② Ito, T., Fukuda, S.E., Fukuda, S. et al. Characteristics of Grammatical Specific Language Impairment (G-SLI) in Japanese: A Case Study. *Studies in Language* 44, 53-59 (2009).

[学会発表] (計 7 件)

- ① Ito, T., Fukuda, S.E. and Fukuda, S. The Acquisition of Passives by Means of the Lexicon and Compensatory Strategies: a Case Study of Japanese Specific Language Impairment. 2nd International Conference on Clinical Linguistics. (2009, 11, 11-13) Universidad Autónoma de Madrid.
- ② Ito, T., Fukuda, S., Fukuda, S.E. et al. Computational and Non-computational Aspects of Language in Japanese Grammatical Specific Language Impairment: a Case Study. 39th Poznań Linguistic Meeting. (2008, 9, 11-14) Collegium Europaeum Gnesense Gniezno, Poland.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 友彦 (ITO TOMOHIKO)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号 : 40159893

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者

大伴 潔 (OOTOMO KIYOSHI)
東京学芸大学・教育実践研究支援センター・教授
研究者番号：30213789

藤野 博 (FUJINO HIROSHI)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：00248270

福田 真二 (FUKUDA SHINJI)
北海道医療大学・心理科学部・准教授
研究者番号：70347780

福田 スズィー (FUKUDA SUZY)
青山学院大学・法学部・准教授
研究者番号：00337867